

モンゴル語族諸言語における語頭子音の軟音化

The Weakening of the Initial Strong Consonants in
Mongolian languages

Huhbator. B. T.

フフバートル

0.

1. 孤立諸言語における語頭子音の軟音化
 - 1.1 第二音節の頭の軟音による同化
 - 1.1.1 第二音節の頭の「一次的軟音」による同化
 - 1.1.2 第二音節の頭の「二次的軟音」による同化
 - 1.2 第二音節の頭の硬音による異化
2. モンゴル語方言における語頭子音の軟音化
 - 2.1 複音節語
 - 2.2 単音節語
 - 2.3 語頭音 s ~ ś の交替形
3. モンゴル語族諸言語における語頭子音軟音化の史的発展

0.

モンゴル語族諸言語の中で、語頭子音の軟音化が認められるのは、中国甘肅省、青海省のドンシャン（東郷）語、バオアン（保安）語、モンゴル（土族）語、シラ・ユグル（東部裕固）語の孤立4言語（以下「孤立諸言語」とする）とモンゴル語の一部の方言（以下「モンゴル語方言」とする）である。

モンゴル語方言については、その分布範囲を、中国領内のモンゴル語に関しては「北緯46°より南、東経107°から119°までの範囲における口語⁽¹⁾」と見ているが、具体的には、チャハル方言をはじめ、シリングル方言、オルドス方言など広い範囲にわたって観察される。モンゴル人民共和国のモンゴル語方言にお

いては、ダリガンガ方言、東部ハルハ方言（ドロンドアイマグ中部、スヘバートルマイマグ）、中部ハルハ方言（アルハンガイアイマグ、ウブルハンガイアイマグ、バヤンホンゴルアイマグ）及びゴビハルハ（ドロノゴビアイマグ、ドンドゴビアイマグ、ウムネゴビアイマグ）にこの現象が見られるという報告がある⁽²⁾。

モンゴル語族諸言語の語頭子音の軟音化は、孤立諸言語では、主として第二音節の頭音が軟音である場合に起きているが、第二音節の頭音が硬音の場合も起きていることがある。しかし、モンゴル語方言においては、第二音節の頭の軟音による語頭子音の軟音化は見られず、第二音節の頭音が硬音の場合は一定の条件において、語頭の硬音が規則的に軟音化していることが目立つ。したがって、モンゴル語族諸言語の語頭子音の軟音化は、基本的に、語の第二音節の頭の軟音による同化か、または語の第二音節の頭の硬音による異化作用である。それゆえ、モンゴル語族諸言語の語頭子音の軟音化は、複音節語に現れるのが普通である。特に、孤立諸言語はそうである。

モンゴル語族諸言語の語頭子音の軟音化を妨げる要素としては、一般に第二音節の頭音に先行する鼻音及び二重母音、長母音がある。しかし、孤立諸言語では、言語により、また、音変化のパタンによりそうした制限を受けないことがある。

本稿では、こうした事情を背景にしてモンゴル語族の孤立諸言語及びモンゴル語諸方言の資料を分析することにより、モンゴル語族の語頭子音の軟音化に関係あると思われる音変化にいくつかのパタンがあることに注目し、それをもとにモンゴル語族語頭子音の軟音化における史的発展を考えてみることにしたい。これに関しては、その他の発展の問題には立ち入らず、語頭子音の軟音化の発展に観察されるすじにのみ従い、私見を論ずることとする。

1. 孤立諸言語における語頭子音の軟音化

ここでは、孤立諸言語の資料として主に内モンゴル大学のモンゴル語研究所による中国国内のモンゴル語族諸言語、諸方言の調査報告資料（1980年）を使用した。ドゥンシャン語とシラ・ユグル語は便利上栗林均1986年、1987年も参照し、補充的資料として『中国少数民族語言簡志叢書』の中から当該言語の『簡志』を利用した。資料については「参考文献」を参照されたい。

1.1 第二音節の頭の軟音による同化

孤立諸言語における語頭子音の軟音化には、言語により、ある条件で第二音節の頭の硬音が作用する場合がある。それを除けば、そのほとんどが第二音節の頭の軟音による同化であり、それが古い軟音であるのが普通である。しかし、音変化による結果と判断される軟音も観察される。ここでは前者を「一次的軟音」、後者を「二次的軟音」と言うことにする。

1.1.1 第二音節の頭の「一次的軟音」による同化

これは、語頭の破裂音 *k にしか見られないが、語頭の *k に第二音節の頭の *d と *ŋ が続く場合、諸言語では規則的に語頭子音の軟音化が起きている。しかし、それに -g- とその他の軟音がくる場合、語頭子音の軟音化が認められるのは、ダウンシャン語とバオアン語だけである。

① -*d-

モンゴル文語	ダウンシャン語	バオアン語	モンゴル語	シラ・ユグル語
q a d a -	g a d a -	g a d a -	g a d a -	g a d a -
打ちつける				
q a d a m	g a d u ŋ	g a d ə m	g a d ə m	g a d a m
(夫婦の)実家				
q a d u -	g a d u -	g a d a -	g a d ə -	g a d ə -
刈る				
k ö d e l -	g o d z i ə l u -	g u d e l -	g u d o l ə -	g ə d e l -
動く				

一方、次の例では、ダウンシャン語とシラ・ユグル語にしか語頭子音の軟音化が起きていない。

k e d ü (n)	g i ə d u ŋ	k u d ə ŋ	k ə d ə	k e d e n
いくつ				
k ü n d ü	g u n d u	k u n t ə	k u n d u n	k u ŋ t ə
重い				

次の単語はダウンシャン語でも語頭子音の軟音化が起きていない。

モンゴル文語	ダウンシャン語
ködüsü(n)	fudɕiəsuɔ
(狍) 羊皮	

この単語は、ダウンシャン語に語頭子音の軟音化が起きていた当時はもう語頭子音が*kではなかった公算が大きい。

この外、シラ・ユグル語にも語頭子音の軟音化が起きていない例が見られる。

モンゴル文語	シラ・ユグル語
qadaɣ	qadaɣ
ハダク(布)	
qandu-	xanda-
面する	

シラ・ユグル語では、語頭の*kがqで保たれているのは、第二音節の頭音が硬音の場合のみである。第二音節の頭音が軟音で、それによる語頭子音の軟音化が起らない場合には、後者の例のように語頭の*kはxになる。したがって、qadaɣは仏教の伝来に伴い、後に借用されたことは明らかであろう。xanda-については、第二音節の頭の軟音に先行する——すなわち、語頭音節の末尾の——鼻音ŋが語頭子音の軟音化の障碍になったものだと考える。

② -ɣ-

モンゴル文語	ダウンシャン語	バオアン語	モンゴル語	シラ・ユグル語
qaja-	ɣadɕa-	——	ɣadɕa-	——
咬む				
kijaɣar	ɣudɕa	——	ɣɕɕa:r	——
境				
küji	——	ɣudɕi	ɣudɕə	ɣudɕə
香				
kürje	——	ɣurdɕig	ɣurdɕaɣ	ɣurdɕeg
シャベル				
küjügü(n)	ɣudɕəɔ	ɣudɕuɔ	ɣudɕə	ɣudɕy:n
頸				

次の例で語頭子音の軟音化が起きているのは、ダウンシャン語だけである。

kejiye	giəɕə	kətɕi	kəɕe:	keɕe:
何時				

ダウンシャン語以外の3つの言語では、語頭音節の*eが語頭子音の軟音化を妨げていると見られる。①のMo, kedü(n) (いくつ) の例も同様である。

③ -*g-

モンゴル文語	ドゥンシャン語	バオアン語	モンゴル語	シラ・ユグル語
qaɣal- 割る	gaɣalu-	gagali-	xagala-	xaga-
quɣul- 折る	gubula-	gөгөл-	xugulə-	huqul-
kirɣa- (秘)刈る	gubaa-	——	töirga-	xərga-
kilɣasun 硬毛	gabasuɣ	——	——	xalgasən
könggen 軽い	göɣgiən	kɵɣkaɣ	kongon	kɵɣgen
kenggergen 太鼓	——	keɣgəräg	kəngərgə	gürəɣa

モンゴル語とシラ・ユグル語では語頭子音の軟音化が起きていないが、第二音節の頭音に鼻音ŋgが先行する場合は、バオアン語でも軟音化が生じていない。①のMo, kündü (重い) は、語頭音節の末音がŋであるが、そこでも同じようにドゥンシャン語以外の言語では語頭子音の軟音化が妨げられている。

次の単語は、ドゥンシャン語でも語頭子音が軟音化していない。

kürge-	quɣo-	kurge-	kurga-	kürge-
届ける				

形態的に考える場合、この単語の第二音節の頭の*gは語幹部に含まれない。すなわち、この単語の語幹は単音節で、-*g-は接辞の一部である。語頭子音の軟音化に接辞が作用しないのは、オルドス方言を除くモンゴル語方言に見られる特徴であるが、ここでも観察される。

モンゴル語にgargaɣ < Mo. qorɣun, 《碗柜》という、語頭子音の軟音化した例がある。しかし、Mo, oは、モンゴル語では, xunə (Mo, qonin, 羊), xulo (Mo, qola, 遠い), ɣu:r (Mo, qoyar, 二) のように -u- に対応するのが普通である。

④ -*r-, -*l-, -*n-, -*m-, -*b-

これらの子音が第二音節の頭に現れた場合、語頭子音の軟音化が起きるのはやはりドゥンシャン語とバオアン語だけである。しかし、この2つの言語においても、語頭子音の軟音化は、語頭音節の母音が*ɔ, *uと*iの場合に限って生じている。

語頭音節の母音が^hoの場合

モンゴル文語	ドゥンシャン語	バオアン語
qoruqai 虫	guβi~guŋgəi	gərgəi
qoni (n) 羊	goni	gəni
qormai 裾	goməi	——
qonu- 泊る	gono-	—— (3)
qola 遠い	golo	golo

次の例は、第二音節の頭音がモンゴル文語では γ であるにもかかわらず、- γ が語頭子音の軟音化に作用したと判断される。

qo γ ulai 喉	goləi	gəli
qo γ ula (n) 食事	goləi	Xələ

語頭子音に- γ -が作用したと思われる例(1.1.1③)には、- γ -の異音が保存されているのに対して、この2つの例にはそうした痕跡が見られない。したがって、これはモンゴル語族諸言語の語頭子音の軟音化の発生した時代をモンゴル語族諸言語の長母音化の問題と関連づけて考える上で重要であると思う。つまり、この2つの例におけるモンゴル文語形の第二音節の頭の γ は、次のバオアン語の例にも見られるように、前後の母音とともに長母音化しているのが一般的である。それで、語頭子音の軟音化に文語形の第三音節の頭音 γ が作用したとすれば、語頭子音の軟音化が起きた当時は、第二音節の頭音 γ はもうすでになくなり、第三音節が第二音節に変わっていたはずである。これは次に掲げる例からもわかるであろう。

モンゴル文語	ドゥンシャン語	バオアン語
a γ ula (n) 山	ula	u:la
ba γ asu (n) 大便	basuŋ	ba:səŋ
to γ uri- 回る	tori-	tə:rə-

語頭音節の母音が'uの場合

モンゴル文語	ドゥンシャン語	バオアン語
qura 雨	gura	gura
quruγu (n) 指	guru	gure
qulayai 盜賊	gu᠔gəi~guᠪi	gəlgəi
qulusu (n) 竹	gulasu᠔	gəlsə᠔
qubiyā- 分ける	guᠪā-	gua-

ここで、最後の例の第二音節の頭音Mo,-b-に対するドゥンシャン語とバオアン語の対応形に注目されたい。Mo,-b-は、ドゥンシャン語では次の例に見られるように-w-の対応形を持つ。

モンゴル文語	ドゥンシャン語
kebeg ふすま	kəwə
kilbar 容易な	gəiwə~gwə
qabud- 膨れる	qawita-

しかし、ドゥンシャン語のguᠪā- (分ける) の-b-は、むしろ次の単語における-g-の対応形に一致している。

qayal- 割る	gabalu-	quγul 折る	guᠪula-
--------------	---------	-------------	---------

これは、問題の単語の第二音節の頭音は、ドゥンシャン語に語頭子音の軟音化が起きたその時点では-b-ではなく、-g-の異音であったことを裏付けるものだと思う。こういう対応形は、モンゴル語族のダグール語にもMo. ebül, Da. uγul (冬) のように観察される。一方、それに対するバオアン語の対応形も-g-であることがモンゴル語のxugua- (分ける) と比較してもわかると思う。バオアン語では、この単語は語頭音節の脱落によりgua-だけが残っている。それに、Mo. ugiya- (洗う) がバオアン語ではgua-であることも注目に価する。即ち

Mo. qubiyā- (分ける), Bau, gua- < *kugiyā

Mo. ugiyā- (洗う), Bau, gua- < *ugiyā

語頭音節の母音が *i の場合

モンゴル文語	ドゥンシャン語	バオアン語	モンゴル語
kimusun	gumusuŋ	gəmɵŋ	tʃimsə
爪			
kiluyi-	——	gali:-	——
斜めに見る			
kilbar	gəiwa~gwwa	——	tʃirwal
容易な			

上記の例において諸言語の語頭音節の母音が *i であることは, Mo, ki- にドゥンシャン語では gw- , モンゴル語では tʃi- が対応することからも明らかであろう。一方, 母音 *o と *u に対するドゥンシャン語とモンゴル語の対応形は次の通りである。

モンゴル文語	ドゥンシャン語	モンゴル語
qoni (n)	goni	xunə
羊		
qormai	goməi	xurmi:
裾		
qura	gura	xura:
雨		
qulusu (n)	gulasuŋ	xuluse
竹		

次の例は, 母音で終わる単音節語であるにもかかわらず, 語頭子音の軟音化が起きているが, これについては, 現時点では何とも言えない。

モンゴル文語	ドゥンシャン語	バオアン語	モンゴル語	シラ・ユグル語
ki-	giə-	——	gə-	gə-~ki:-
する				

1. 1. 2 第二音節の頭の「二次的軟音」による同化

第二音節の頭の「二次的軟音」による同化と判断される語頭子音の軟音化は, ドゥンシャン語とモンゴル語に若干の例が観察されるものの, モンゴル語族諸言語における語頭子音の軟音化の問題を検討する上では見逃すことのできない現象であり, 孤立諸言語の語頭子音の軟音化の発展において特殊な位置を占

めるのではないかと思う。

第二音節の頭の「二次的軟音」による同化の問題を取り上げるには、まず同化に作用したと判断される第二音節の「二次的軟音」の発展、すなわち、第二音節の頭の硬音が軟音化した段階から考察を始める必要がある。周知の通り、孤立諸言語では、語頭子音の軟音化が認められると同時に第二音節の頭音の軟音化も認められる。第二音節の頭音の軟音化は、語頭音が硬音である場合に、より規則的に起きている。けれども、モンゴル語ではほぼ無条件に軟音化が起きている。但し、語頭音が母音と鼻音である場合は事情が異なる。第二音節の頭音の軟音化と言っても、-s-は軟音化する例が少なく、モンゴル語の *xu dʒə*(Mo. *qosiryu*, 鼻先) が見られるぐらいである。これは、後述するモンゴル語方言でもs-は軟音化に消極的であることによく似ている。事情はやや複雑であるが、孤立諸言語における第二音節の頭音の軟音化をだいたい次のようにまとめることができる。

a. 語頭音が古い母音の場合

モンゴル語を除く諸言語では基本的に軟音化が起きていない。バオアン語では、語頭の *i の脱落により軟音化が起きているようだが、ダウンシャン語では語頭音が *a の場合を中心に軟音化が起きている。逆に、モンゴル語では、第二音節の頭音に長母音と鼻音が先行することにより、また、母音添加により問題の位置の軟音化が妨げられている。

モンゴル文語	ダウンシャン語	バオアン語	モンゴル語
i č e g ü r i 恥	ʒ i d ʒ ə -	ʒ d ʒ e g e r	ʒ d ʒ e : -
a m t a t u おいしい	a n d a t u		a m u t a d i :
a q a 兄	a ʒ a		a ʒ a
a s k i - 打つ	a ʒ u -		
a č i 孫			a : t ʒ ə
a n g č i n 獵人			a ŋ ʒ ə

b. 語頭音が鼻音 *m* と *n* の場合

ここではモンゴル語でも軟音化しない傾向がある。それゆえ、軟音化する

例が逆に少なく、次の例が見られるだけである。Sda: - (Mo. marta -, 忘れる), madu (Mo. metü, ような), noɕdo : (Mo. noɣtu, 馬の端綱)。軟音化する例はほかにダウンシャン語に maga (Mo. miqan, 肉) があるのみで、シラ・ユグル語には例が見られない。

語頭子音が *d, *g, *ɣ の場合でも第二音節の頭音の軟音化する例が観察されるが、基本的に、バオアン語とシラ・ユグル語では軟音化する傾向がみられない。しかし、*ɣ- の場合、シラ・ユグル語では ɕa : nɕə - (Mo. janči-, 打つ), ɕaga (Mo. jaqa, えり), ɕoɕə - (Mo. joki-, 合致する) という軟音化の例がある。

c. 語頭音が硬音の場合

説明の都合により、語頭の硬音を次の順序で並べることとする。

① *k-

ダウンシャン語では、第二音節の頭音の *t に鼻音 -n- が先行する場合と第二音節の頭の硬音が二重母音に先行される場合、バオアン語でも後者の場合は問題の位置の軟音化が妨げられている。ところが、バオアン語とシラ・ユグル語では、第二音節の頭音に鼻音が先行する場合、むしろ軟音化が起きているのは興味深いことである。一方、モンゴル語では『土族語詞彙』に見られる例外も『土族語簡志』では軟音化が確認されているため、例外なく軟音化していると言えるだろう⁽⁴⁾。

モンゴル文語	ダウンシャン語	バオアン語	モンゴル語	シラ・ユグル語
qamtu 一緒に	hant u	hamdə	xamdə	xamdə
qančui 袖	gandɕuɣ	handzu	xamdɕə	xandɕun
qongqu 鈴	guɣguɣ	——	xoɣgur	xoɣgo
kerčii- 切る	kiɕii-	——	kərdɕə-	——
qayiči 鉄	qaitʂi	Xi : tɕi	xaiidɕə	xaitʂə
küiten 寒い	kuitɕiən	kit aɣ	kuiden	kyten
kituɣa 刀	qudoɕo	doɕə	tɕidogv	qutaɕa

② *s-

ここでは、ダウンシャン語とモンゴル語は規則的に軟音化しているが、バオアン語とシラ・ユグル語の事情はやや複雑である。

モンゴル文語	ドゥンシャン語	バオアン語	モンゴオル語	シラ・ユグル語
sakal 髭	sabax	saxal	sgal	sagal
saki- 守る	sabi-	saxa-	sgə-	saxə-
soytu- 酔う	sodo-	səxta-	səgdə:-	səgtə-
soqur 盲の	subo	səxər	sgur	səgər
süke 斧	sugiaə	ʂge	sugo	suke
siqa- 搾る	siba-	çiXa-	ʂga:-	ʃəqa-

③ *h-

何らかの形で *h- が保存され、またその影響で第二音節の語頭の軟音化が起きている場合が多い。

モンゴル文語	ドゥンシャン語	バオアン語	モンゴオル語	シラ・ユグル語
erte 早い	ətʃiə	erte	ʂde	hərte
ičee- 恥じる	ʂidʃə-	ʂdʃe-	ʃdʃe:-	hʃe-
oqur 短い	oqo	gər	xugur	hgər
urtu 長い	fudu	ʂdər	ʂdu	hurtu
üker 牛	fugiaə	əkər	fugor	hgor
ükü- 死ぬ	fugu-	hgu-	fugu-	hku-

④ *t-, *č-

ここでもドゥンシャン語とモンゴオル語では規則的に軟音化が起きているのに対して、バオアン語とシラ・ユグル語ではそれがほとんど見られない。

モンゴル文語	ドゥンシャン語	バオアン語	モンゴオル語	シラ・ユグル語
temteri- 手探りする	tʃiəntʃiəlu-	temdel-	temdələ-	——
tobči ボタン	tədʃi	dəbtʃi	təbdʃə	təbʃə
takiyan 鶏	tuga	təXa	təgau	dagqa
toqu- (馬鞍) 付ける	tobu-	təXə-	tugv-	təgə-
čabči- 切る	tʂidʃi-	dʃabʃi-	tʃəbdʃə-	dʒabʃə-

čiki (n) tʂiʧəʊ tʂiXaʊ tʂigsə tʂkən
耳

ここで注目されるのは、孤立諸言語は第二音節の頭音の軟音化が起きているのと、起きていないのとで2つのグループに明瞭に分かれていることである。

d. 語頭音が*bの場合

孤立諸言語において、語頭の*bが第二音節の頭の硬音に逆行同化され、P-になるが、P-ではじまる単語における第二音節頭音の軟音化の問題は事実上C（語頭音が硬音の場合）に含まれる。無論、P-になっていない例もあるが、ここにも上記の通り孤立諸言語は同じ2つのグループにはっきり分かれている。

モンゴル文語	ドゥンシャン語	バオアン語	モンゴル語	シラ・ユグル語
bayta- 納まる	puda-	——	paɣda-	bagta-
batu 固い	pudu	batə	padə	bat
bičii- 書く	pidɕii-	pəʧii-	puɕii-	pəʧə-
bučaal- 沸く	puɕaal-	——	——	hʧəl-
burčaaɣ 豆	puɕaa	pəʧaaɣ	puɕaaɣ	pərʧaaɣ
burqan 仏	——	——	purɣa:n	pərqan
bütün 完全な	pudu-	putəʊ	——	putən

ここで見られる語頭子音の硬音化（P<*b）に第二音節の頭の硬音が作用したとすれば、ドゥンシャン語とモンゴル語に見られる第二音節の頭音の軟音化は、明らかに語頭子音の硬音化より後に起きたことになる。次の例も上記のような発展段階を経たと思われる。

モンゴル文語		ドゥンシャン語	バオアン語	モンゴル語	シラ・ユグル語
dotura	中	sudoro		tudor	
ɣaɣai	豚	qʊɣəi	ɣai	xɣai	
ɣarču-	出て	qʊɕii-			
gičige	雌犬	kiɕəu			
ɣaɣčaɣaɣ	単独で			xadɕəɣa:r	
ɣuursu	パイプ			xu:rdzə	
ɣučin	三十			xu:ɕin	
dabqur	2重の			taɣʊr	
dutaɣu	不十分の			tədaʊ	
debtüge-	浸す			tədə:-	
dutaɣa-	逃走する		tədə:-	tuda:-	
döči (n)	四十			təɕin	

ここで、孤立諸言語における第二音節の頭音の軟音化に見られる事情をまとめると次の表のようになるが、+は、軟音化が基本的に起きていること、そして、-は基本的に起きていないこと、また、干と±はそれぞれ起きている場合があることと、起きていない場合があることを意味する。

孤立諸言語第二音節頭音軟音化一覧表

語 頭 音	ドゥンシャン	バオアン	モンゴオル	シラ・ユグル
古 母 音	干	-	+	-
鼻 音	-	-	-	-
硬音 *k-	±	干	+	干
*s-	+	干	+	干
*h-	±	干	+	干
*t-	+	-	+	-
*č-	+	-	+	-
軟音 p-<*b	+	-	+	-
k-<*g	+	-	+	-
t-<*d	+	-	+	-

以上、孤立諸言語における第二音節の頭の「二次的軟音」の発展を検討してみた結果、語頭音が硬音である場合、ドゥンシャン語とモンゴオル語では、第二音節の頭音がほぼ規則的に軟音化していることがわかった。したがって、問題の第二音節の頭の「二次的軟音」による語頭子音の軟音化もこの2つの言語において観察されるのが自然であろう。

では、次に第二音節の頭の「二次的軟音」による語頭子音の軟音化と見られる例を見ることにしたい。

モンゴル文語		ドゥンシャン語	バオアン語	モンゴオル語	シラ・ユグル語
qančui	袖	gandɕuɯ			
qongqu	鈴	guɯguɯ			
kökü-	乳を吸う	gogoo-			
kökü(n)	乳房	gogoo			
quča	種羊	gudɕa			
qadqu-	刺す			gasqu-	
qudqu-	混ぜる			gusqu-	
tusqa-	当てる	dosko-			
čiči-	刺す			ɕæθɕæ-	

上記の例では、第二音節の頭の「二次的軟音」による語頭子音の軟音化はドゥンシャン語とモンゴル語とともに語頭子音が *k- の場合を中心に起きているが、*Dictionnaire Monguor-Français* では、モンゴル語でこういう音変化を蒙ったと考えられる単語は *t- と *č- ではじまる語にも次の例が見られる。

Mo.	Monguor	—	Français
tarčila-	dārčžila-		"grimper (plantes)"
tusqu	dušqu		"coupe qu'on présente aux invités à un festin nuptial"
tenčire-	diändgrië-		"avoir le vertige"
čabčī-	ḍžīäḅšḅžī-		"hacher, couper, clignoter (yeux)"
tobčī	diešḅžī		"bouton"

このような例はシラ・ユグル語にも *ge:gəre-* (Mo. *kekere-*, おくびする), *gudčyr* (Mo. *küčir*, 難しい) の2つの単語が見られるが、これを第二音節の頭の「二次的軟音」による同化と見るには問題がある。まず、上述の通り、シラ・ユグル語では、語頭音が *k- の場合、第二音節の頭の硬音に鼻音が先行する時を除いて、第二音節の頭音は軟音化しないのが一般的である。次に、シラ・ユグル語では後述するように第二音節の頭の硬音による語頭子音の軟音化が起きている。

1.2 第二音節の頭の硬音による異化

硬音ではじまる語頭音節に硬音ではじまる第二音節が後続する場合、ドゥンシャン語とモンゴル語では第二音節の頭音が軟音化しているのに対して、バオアン語とシラ・ユグル語では、語頭子音が軟音化している。後者は規則的とまでは言えないが、同一条件における音変化が前者の2つの言語とは異なり、むしろ、モンゴル語方言のそれに一致していることが注目される。

モンゴル文語	バオアン語	シラ・ユグル語	チャハル方言
qata 乾く		gata-	gata-
qatun 妃		gatən	gataḅ
qabtagai 平たい		gabtagai	gaβtge:
qaltar 斑の		galtar	galtar
kebte- 臥す		gebte-	geβtë-

q o s i ɣ u (n)	g ɔ ɕ ɔ ɔ		g ɔ ʃ ɔ :
唇			
t a s u l -	d a s a l -	d a s ä l -	d a s a l -
絶つ			
t a k i -		d a k ə -	d ɛ x ə -
祭る			
t a k i y a (n)		d a g q a	d i x a :
鶏			
t o b č i	d ɔ b tɕ i		d ɔ β tɕ ɔ
ボタン			
t e b š i	d e b ɕ i		d ə β ʃ ə
皿			
t ü b s i n	d e b ɕ a ɣ	d o g ʃ y n	d ɔ β ʃ i ɣ
平らな			
č a s u (n)	d z a s ɔ ɔ		d z a s ä
雪			
č a b č i -	d z a b tɕ i -	d z a b tɕ ə -	d z i β tɕ ə -
切る			

シラ・ユグル語では、語頭子音の軟音化は語頭音節の母音がaの場合を主として起きているようであるが、バオアン語ではそれが言えない。

2. モンゴル語方言における語頭子音の軟音化

モンゴル語方言における語頭子音の軟音化は、第二音節の頭の硬音による異化現象である。硬音ではじまる語頭音節に硬音ではじまる第二音節が続く時、語頭子音の軟音化が起きるが、語頭音節の末音が鼻音、或いは、二重母音と長母音化である場合は軟音化が妨げられる。モンゴル語方言の語頭子音の軟音化は、孤立諸言語の場合より一層規則的であると言えるが、与えられた資料を見る限り、上述の条件において摩擦音 s- の軟音化の状況がやや異なることを除けば、同一の条件で語頭子音が軟音化するという点では、方言の差はほとんど認められない。したがって、ここでは、モンゴル語方言における語頭子音の軟音化の問題点を中心に検討していくことにする。

モンゴル語方言の語頭子音の軟音化は、第二音節の頭の硬音による異化であ

ると言っても、第二音節の頭の硬音が語幹部に含まれる場合に限る。しかし、オルドス方言では $g\ddot{o}l\ddot{t}i < Mo, k\ddot{o}l\text{-}tei$ (足のある), $g\ddot{o}b\ddot{t}i < Mo, q\ddot{o}b\text{-}\ddot{c}i$ (中傷人) のように、第二音節の硬音が接辞の一部である場合も語頭子音の軟音化が起きている。

2.1 複音節語

2.1.1 破裂音 t-、k- と破擦音 c-

モンゴル文語		オルドス方言	チャハル方言	ダリガンガ方言
tata-	引く	$d\ddot{a}f\ddot{a}$ -	$d\ddot{a}t\ddot{a}$ -	$d\ddot{a}f\ddot{a}$ -
talqa	粉	$d\ddot{a}l\ddot{x}\ddot{a}$	$d\ddot{a}l\ddot{x}\ddot{a}$	$d\ddot{a}l\ddot{x}$
tosu(n)	油	$d\ddot{o}s\ddot{o}$	$d\ddot{o}s\ddot{o}$	$d\ddot{o}s$
tobči	ボタン	$d\ddot{o}\beta\ddot{t}\ddot{s}i$	$d\ddot{o}\beta\ddot{t}\ddot{s}\ddot{o}$	
qataru	硬い	$g\ddot{a}f\ddot{q}$	$g\ddot{a}t\ddot{a}$:	$g\ddot{a}f\ddot{q}$
köke	青い	$g\ddot{o}^f\ddot{x}\ddot{o}$	$g\ddot{o}x\ddot{o}$	$g\ddot{o}x$
kögsin	年取った	$g\ddot{o}^f\ddot{s}^f\ddot{x}\ddot{o}n$	$g\ddot{o}x\ddot{f}i\ddot{n}$	$g\ddot{o}x\ddot{s}i\ddot{n}$
quča	雄羊	$g\ddot{q}^f\ddot{t}\ddot{s}\ddot{a}$	$g\ddot{a}t\ddot{s}\ddot{a}$	$g\ddot{q}^f\ddot{t}\ddot{s}$
čiki(n)	耳	$\ddot{t}\ddot{s}i^f\ddot{x}\ddot{e}$	$\ddot{t}\ddot{s}i\ddot{x}\ddot{o}$	$\ddot{t}\ddot{s}i\ddot{x}$
času(n)	雪	$\ddot{t}\ddot{s}\ddot{a}s\ddot{u}$	$\ddot{t}\ddot{s}\ddot{a}s\ddot{a}$	$\ddot{t}\ddot{s}\ddot{a}s$

一方、次の例のような場合は語頭子音の軟音化は起きない。

taraγ	ヨーグルト	$f\ddot{a}r\ddot{a}k$	$t\ddot{a}r\ddot{a}g$	$f\ddot{a}r\ddot{a}g$
qančui	袖	$x\ddot{a}n\ddot{t}\ddot{s}^f\ddot{q}$	$x\ddot{a}n\ddot{t}\ddot{s}i$:	$x\ddot{a}n\ddot{t}\ddot{s}i$
qoyitu	北の	$x\ddot{o}^f\ddot{q}^f\ddot{d}^f\ddot{q}$	$x\ddot{a}t$:	$x\ddot{o}^f\ddot{t}$
čamča	シャツ	$\ddot{t}\ddot{s}\ddot{a}m\ddot{t}\ddot{s}\ddot{a}$	$\ddot{t}\ddot{s}i\ddot{m}\ddot{t}\ddot{s}\ddot{a}$	$\ddot{t}\ddot{s}\ddot{a}m\ddot{t}\ddot{s}$

2.1.2 摩擦音 s- と š-

s- の場合、語頭子音の軟音化がはっきり認められるのは、ダリガンガ (アスガトソム) 方言、ウジムチン (西) 方言だけである。

モンゴル文語		オルドス方言	ウジムチン方言	ダリガンガ方言
sagal	ひげ	$s\ddot{a}x\ddot{q}l$	$z\ddot{a}x\ddot{a}l$	$\ddot{t}\ddot{s}\ddot{a}x\ddot{a}l$
saki-	守る	$s\ddot{a}^f\ddot{x}i-$	$z\ddot{a}x\ddot{a}i-$	$\ddot{t}\ddot{s}\ddot{a}x\ddot{a}i-$

s e d k i l 心 s e d^fx i l z e d X e l ɳ e f G i l
 s ü k e 斧 s u f^fx e z ü X ɳ ü X e

しかし、Róna-Tasは、s-の軟音化がオルドス方言にも見られることを次のように指摘している⁽⁶⁾。

Mostaert writes in his Phonology that the initial s-becomes sporadically ɳ- or z- in the words of weakening categories. The *Dictionnaire* does not mark these cases, therefore they escaped the attention of Mongolists.

そうして、オルドス方言の例を2つ挙げている。

ɳʉXǎ (LM suqai) ' tamaris'
 zalk'in (LM salkin) ' wind'

したがって、オルドス方言の語頭sの軟音化には破擦音ɳも、摩擦音zもあったであろう。それをモスタールトが辞書に書き入れなかったのは、当時のオルドス方言でも揺れがあったからかも知れない。ちょうどこれを裏付けるように、チャハル方言の資料からも次のような報告が出されている⁽⁷⁾。

チャハル方言では地域により、sの後にt, s, x等の子音が現れる時、sは破擦音ɳとして発音される。年寄の場合は特にそうであるが、現在の若者のことばからは消えつつある。例えば

ɳə t l ǎ x (裂いて)穴をあける ɳo s 胆汁
 ɳε x ʌ l 戒律 ɳo x 斧
 ɳə t g ǎ l 心、気持

語頭子音šの場合、ダリガンガ(アスगतсом)とウジムチン(西)方言の外、チャハル方言でも語頭子音の軟音化が規則的に生じている。しかし、それがウジムチン方言とチャハル方言では硬口蓋摩擦音jになっているのに対して、ダリガンガ方言では硬口蓋歯茎破擦音ɳʃになっている。

モンゴル文語	ウジムチン方言	チャハル方言	ダリガンガ方言
š a t u はしご	——	j a t ǎ, (j) i t ǎ	ɳ ʃ t
s i t a - 焼く	i' t -	(j) i t ǎ -	ɳ ʃ a ʃ a -
s i q a - 搾る	j a X -	(j) i x ǎ -	ɳ ʃ a X a -

s i b s i g j e w š i g (j) i β ſ i g

恥

2.1.3 例外

上述の通り、モンゴル語方言の語頭子音の軟音化はかなり規則的に起きているようであるが、各方言の事情を徹底的に調査することは困難であるため、ここではチャハル方言に絞ってみた結果現れた例外を掲げることにする。

①モンゴル文語形の第二音節の頭音が硬音でないにもかかわらず、語頭子音の軟音化が起きている例。

モンゴル文語	チャハル方言	
t a r a q a i	d a r x ε :	分散的
t a r i k i	d ε r x ä	脳
q o r u q a i	g o r x æ :	虫
q a l a q a i	g a l x ε :	熱(77-)
t ü l e k e i	d u l x e :	熱(77-)

前の3つの例はともに、第二音節の頭音がふるえ音rであることが注目される。後の2つの例は、日本語の「アツ」のように、手など体の一部を焼いた瞬間に声を上げて言うことばである。いずれも第二音節の短母音が消失したことで語頭音節が閉音節となり、それにより語頭子音の軟音化が生じたと思われるが、特に後者の例の場合は、その使い方からみて他の同じ条件の単語よりいち早く語頭音節が閉音節化した可能性があると思われる。

②モンゴル文語形の第二音節の頭音が硬音であるにもかかわらず、語頭子音の軟音化が起きている例。

モンゴル文語	チャハル方言
q o r č i n	x o r t ſ i ŋ
ホルチン	
q u t u r t u	x æ t ä g t
活仏	
š a s t i r	f a s t ä r
史籍	
š ü l k ü g e	f u l x e :
一種の伝染病	

これらの単語が日常生活に用いられる基本語彙ではないことは言うまでもない。しかし、なぜ語頭子音が軟音化しなかったかを言うのは難しいが、Mo, qorčĭnについては、チャハルでは一般にホルチンとハラチン(Mo, qarčĭn.カラチン)を区別せずにgartsibと言っていたので、「ホルチン」というのはこの方言ではあまりなじみのない名称だと言えるであろう。

2.2 単音節語

ここで語頭子音の軟音化が認められるのは、-sを音節末にする単音節語だけである。周知の通り、-sは、モンゴル文語の音節末子音では唯一の硬音である。したがって、モンゴル文語では単音節語であっても、方言により、または場合により、実際に発音される時-sに母音が伴う発音となつて、-sは事実上、第二音節の頭の硬音として語頭子音の軟音化に作用している可能性もあるのではないかと思う。

モンゴル文語	オルドス方言	チャハル方言	ウヅムチン方言	ダリガンガ方言
qas ひすい、まんじ	_____	gas, xas	gas, Xas	gas
qous 一対(の)	Gošĭ, Xos	gos, xos	gos, Xos	_____
qos 腸	Gqšĭ	gos	_____	šos
tos- 迎える	Dos-	dosš-	_____	_____
tus- 当る	Dŭs-	dosš-	_____	_____
tes- 耐える	Dos-	desš-	Dsš-	_____

2.3 語頭音s~čの交替形

s~čの交替形には、モンゴル文語における交替形があると同時に方言により異なる語頭形を持つ例がある。

2, 3, 1モンゴル文語ではs~čの交替形を持っているにもかかわらず、諸方言ではč (>čĕ, čz) に統一している単語。

モンゴル文語	オルドス方言	チャハル方言	ウヅムチン方言	ダリガンガ方言
sačĕu- } čäčĕu- } 撒く	čĕ a'čĕ ŭ-	čĕ i tš ä-	čĕ a'čĕ a-	čĕ a tš a-
sačäγu } čičäγu } 同じ年の	čĕ i tš ŭ	čĕ i tš ∅ :	_____	_____
		čĕ ∅ tš ∅ :		

$\left. \begin{array}{l} s o \check{c} i - \\ \check{c} o \check{c} i - \end{array} \right\} \quad \check{c} o \check{t} \check{s} i - \quad \check{c} \check{c} \check{c} \check{c} \check{c} - \quad \check{c} o \check{t} \check{s} i - \quad \text{-----}$
 驚く

上記諸方言のこれらの単語における語頭子音の前段階は s-ではなく、č-であったことは確かであろう。それは、これらの諸方言における s-の軟音化の形は \check{c} -か z -で、一律歯音であること。そして、それに対する č-の軟音化の形はダリガンガ方言を除いて、すべて \check{c} という硬口蓋歯茎音であることが挙げられる。それに、ダリガンガ方言でも -i- の前の č- の場合は、 $\check{c} i X$ (Mo. $\check{c} i k i n$, 耳), $\check{c} i \check{c} \check{t} \check{s} i$ (Mo. $\check{c} i \check{g} \check{c} i$, 小指) のように \check{c} -ではなく、 \check{c} -である。したがって、上の列の $s a \check{c} a \gamma u \sim \check{c} i \check{c} a u$ のダリガンガ方言の対応形がこの問題を解くかぎになりうと思うが、本稿で主として利用された "A Dariganga Vocabulary" にはこの単語は掲載されていない。しかし、他の資料によりこの単語の語頭形が \check{c} ではなく、 \check{c} であることが確認できた⁽⁸⁾。

3.3.2 方言により異なる語頭形を持つ例。

モンゴル文語	オルドス方言	チャハル方言	ウジムチン方言	ダリガンガ方言
$s i k i r$	} $\check{s} i^* x e r$	(j) $i x \check{c} r$	$\check{c} i X i r$	$\check{c} i X e r$
$\check{c} i k i r$				
糖				
$s \check{o} (1) S \check{u} n$	} $\check{c} \check{c} u s u$	$s o s \check{o}$	$z \check{c} s$	-----
$\check{c} \check{o} s \check{u}$				
胆汁				

Mo. $s i k i r$ (糖) は、ヨーロッパ諸言語のこの意味に該当する単語、例えば、英, *sugar*, 露, *saxap* とともにサンスクリット語の $\check{c} a r k a r \check{a}$ にさかのぼるが、モンゴル語の場合は、ウイグル語の $\check{s} \check{a} k \check{a} r$ < Mir (Middle Iranian), $\check{s} a k a r$ からきていると思う。しかし、この単語はモンゴル語の諸方言において \check{s} -系と \check{c} -系の二通りの語頭形を持っていることが知られている。上に挙げられた各方言を、それぞれの方言における語頭の軟音化の形から判断して、オルドス方言(軟音化していない)とチャハル方言は \check{s} -系に属するもので、ウジムチン方言とダリガンガ方言は \check{c} -系に属するものであるとすることができる。ハルハ方言も後者であるが、これをウラチーミルツォフは、借用語において、Mo. \check{s} -はハルハ方言ではしばしば $\check{t} \check{s}$ になると言っている。

Mo. $s \check{o} l s \check{u} n \sim \check{c} \check{o} s \check{u}$ (胆汁) もモンゴル語族諸言語や諸方言において s-系と

č-系に分かれていることが知られている。

s-系言語 (方言)	č-系言語 (方言)
バオアン語, s e l s u ŋ	ダゲール語, tʃ u l tʃ
シラ・ユグル語, s ø s ø n	オイラト方言, t s ø s ø n
チャハル方言, s o s	ハルハ方言, t s ø s

チャハル方言と同じように、ウジムチン方言もs-系であることが容易に分るが、残るのはオルドス方言の問題である。しかし、その軟音化の形から、オルドス方言のこの単語における語頭音の前段階はs-ではなく、č-であったことははっきりしている。したがって、オルドス方言はこの場合č-系言語 (方言) に属するのである。

3.3.3 方言によりč-系の一つの単語に統一しているか、あるいはs-系とč-系の2つの単語に分かれている例。

モンゴル文語	オルドス方言	チャハル方言	ダリガンガ方言	ハルハ方言
s e č e n	s e tʃ i n	s ø tʃ i ŋ	ɹ e tʃ e n	t s e t s e n
č e č e n	č e i tʃ i n	č e i tʃ i ŋ		
賢明な				
ねらいの正しい				

この例はチャハル方言の話手には同一の単語として意識されず、前者 (s-系) は「賢明な」の意味で、後者 (č-系) は「ねらいの正しい」の意味であり、まったく別の二つの単語として理解されている。ダリガンガ方言に見られる語頭子音の軟音化の形からは、それがその方言においてs-であったか、それともč-であったかは判断できないが、ハルハ方言の形も考えあわせるとč-であった公算が大きい。しかし、中世モンゴル語の資料では次の例のように、この単語の語頭形はs-で、しかも、《聰明》の意味でかなり安定して使われていたことがその文脈からわかる。ここに簡単に例を挙げることにしたい。

【蒙古秘史】	【華夷詠語】
薛禪額客	薛禪別児猛 [♯] 合 [■] 巴牙孫
	薛禪 [♯] 合罕客延捏 [♯] 列亦 [■] 周兀

無論、オルドス方言のč e i tʃ i nとチャハル方言のč e i tʃ i ŋはč-系の軟音化による形であることは明かである。

3. モンゴル語族諸言語における語頭子音の軟音化の史的発展

以上、モンゴル語族諸言語の語頭子音の軟音化に関して4つのパタンがあることに気づいた。これらの音変化のパタンは、それぞれの特徴により、モンゴル語族諸言語の語頭子音の軟音化の発展を論ずる上で重要な意味を持つであろう。

次に、これまで分析してきた4つのパタンをまとめてみることにしよう。

A 第二音節の頭の「一次的軟音」による語頭子音の軟音化

硬音ではじまる語頭音節に古い（一次的）軟音ではじまる第二音節が後続する場合、語頭の硬音が軟音化する。

モンゴル文語	ドゥンシャン語	バオアン語	モンゴオル語	シラ・ユグル語
q a d a -	g a d a -	g a d a -	g a d a -	g a d a -
打ちつける				
q a d a m	g a d u ŋ	g a d ə m	g a d ə m	g a d a m
(<small>犬の</small> 解の)実家				

B 第二音節の頭音の軟音化

硬音ではじまる語頭音節に硬音ではじまる第二音節が後続する場合、第二音節の頭の硬音が軟音化する。

モンゴル文語	ドゥンシャン語	モンゴオル語
t o b č i	t ə d ɛ i	t e b d ə ə
ボタン		
č a b č i -	t ʂ i d ɛ i -	t ʂ ə b d ə ə -
切る		

C 第二音節の頭の硬音による語頭子音の軟音化

硬音ではじまる語頭音節に硬音ではじまる第二音節が後続する場合、語頭の硬音が軟音化する。

モンゴル文語	バオアン語	シラ・ユグル語	チャハル方言
q a t a -		g a t a -	g a t ä -
乾く			
t a s u l -	d a s a l -	d a s ä l -	d a s a l -
断つ			

D 第二音節の頭の「二次的軟音」による語頭子音の軟音化

硬音ではじまる語頭音節に音変化による（二次的）軟音ではじまる第二音節が後続する場合、語頭の硬音が軟音化する。

モンゴル文語	ドゥンシャン語	モンゴル語
k ö k ü -	g o g o	
乳を吸う		
č i č i -		d z æ ʧ d z ə -
刺す		

AとDのパタンは、第二音節の頭の軟音による語頭子音の軟音化である。しかし、モンゴル語方言における語頭子音の軟音化には第二音節の頭の軟音による同化作用は認められない。したがって、AとDにおいては、孤立諸言語とモンゴル語方言の双方に語頭子音軟音化の発展の並行性、或は、言語接触による影響はないといえることができる。

Aでは、語頭の*kに*ɬ, *ʃで始まる第二音節が続く場合（1, 1, 1）孤立諸言語に発展の並行性が見られる。それを、孤立諸言語の共同体が分化する以前に起きたと位置付けることが可能である。これにより、Aのパタンを孤立諸言語における語頭子音の軟音化の発展の前段階であると位置付けることもできると思う。Aのパタンの中でも最初の段階では諸言語に発展の並行性が見られた（1, 1, 1①～②）が、後に（1, 1, 1③～④）同じ条件で語頭子音の軟音化が起きるか、起きないかで孤立諸言語はドゥンシャン語とバオアン語、そして、モンゴル語とシラ・ユグル語の2つのグループに分れた。しかし、BとCでは変って、ドゥンシャン語とモンゴル語、そして、バオアン語とシラ・ユグル語というふうに、同一グループ内の2つの言語は共通の音変化を蒙るようになって（1, 1, 2と1, 2）。そして、Bにおける2つの言語（ドゥンシャン語とモンゴル語）は、Dの段階でも共通の特徴を持つ同一グループとして発展している（1, 1, 2）。

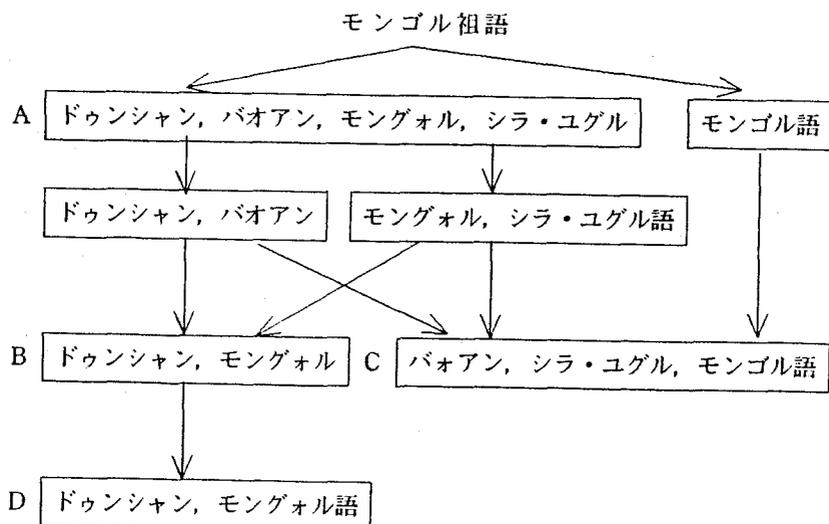
Dは必ずBの段階を経過したと考えるところから、DはBの新たな発展段階を反映するものだと見ることができる。そうするとBはDの前段階であったことになる。そして、Dは、Cとは発展の上で直接関係がないため、Dの段階をモンゴル語族諸言語の語頭子音軟音化の最も新しい発展段階であると位置付けることも可能であろう。

したがって、BとCは、発展の中間段階になるが、そこで孤立諸言語はAの

後段階（1, 1, 1③~④）から新たな発展段階を迎え、同一条件（硬音ではじまる語頭音節に硬音ではじまる第二音節が後続する場合）でB（ドゥンシャン語とモンゴル語）では、第二音節の頭の硬音が軟音化したのに対して、C（バオアン語とシラ・ユグル語）では、語頭の硬音が部分的に軟音化するという異なる方向への異化作用が行なわれたようである。ここでBとCのどれが先に起きたかという問題を追求するのはあまり意味のないことである。

孤立諸言語においてはモンゴル語族諸言語の語頭子音の軟音化に関する4つのパタンが全部見られるが、モンゴル語方言ではそれがCのパタンしかないので、上述の4つのパタンの中で孤立諸言語とモンゴル語を包括しているのはCのパタンのみである。したがって、孤立諸言語とモンゴル語方言における語頭子音の軟音化において発展の並行性が認められるのはCのパタンだけである。Cのパタンにおいても、モンゴル語方言の音変化は規則的であるのに対して、孤立諸言語（ここではバオアン語とシラ・ユグル語）では音変化に厳しい規則性が見られず、語頭子音の軟音化は部分的にしか起きていない。したがって、孤立諸言語とモンゴル語方言における語頭子音の軟音化には部分的にしか発展の並行性が認められない。

モンゴル語族諸言語語頭子音軟化発展段階



モンゴル語族諸言語語頭子音軟音化一覧表

語頭音	第二音節頭音		先行音	クンツァン	バキアン	モンゴキル	シラ・ユグル	モンゴル		
*k-	軟音	一次	*d-	*e- 以外	+	+	+	+	-	
			*e-		+	-	-	-	-	
			*n-		+	-	-	-	-	
			*j-	*e- 以外	+	+	+	+	-	-
			*e-		+	-	-	-	-	
			*g-	*ng- 以外	+	+	-	-	-	
			*ng-		+	-	-	-	-	
		*r-	*o-	+	+	-	-	-		
		*l-	*u-	+	+	-	-	-		
			*o-	+	±	-	-	-		
			*u-	+	+	-	-	-		
			*i-		+	+	-	-		
			*n-	*o-	+	+	-	-		
			*m-	*o-	+	+	-	-		
	*b-	*i-	+		-	-				
*k-	二次的	-g-		+	-	+	-	-		
-j-			+	-	-	-	-			
*t-		-g-		+	-	+	-	-		
*t-		-j-		-	-	+	-	-		
*t-		-j-		-	-	+	-	-		
*k-	硬音	二次的	*t-	鼻音, 二重母音, 長母音以外	-	-	-	+	+	
*k-				-	-	-	-	+	+	
*t-				-	-	+	-	-	+	+
*t-				-	-	-	-	-	+	+
*t-				-	-	-	-	+	+	+
*t-				-	-	-	-	-	+	+
*t-				-	-	-	-	+	+	+
*t-				-	-	-	-	-	+	+
*t-				-	-	-	-	-	+	+
*t-				-	-	-	-	-	+	+
*t-				-	-	-	-	-	+	+
*t-				-	-	-	-	-	+	+
*t-				-	-	-	-	-	+	+
*t-				-	-	-	-	-	+	+

(空白は当該の条件に当てはまる単語が見つからなかったことを意味する)

(注)

- (1) 道布「蒙古語口語中的詞首輔音弱化現象」『民族語文』, 第1期, 1981年, 43頁
- (2) Монгол, Ард, *Улсын угсаатны судлал, хэлний шинжлэлийн атлас, Улаанбаатар, 1979.*
 Porpe, N. *Introduction to Mongolian comparative studies*, Helsinki, 1955, P.21, 139.
 Чолоо, Ж. "Говийн халхын аман аялгууны үгийн бүрэлдэхвний зарим онцлог", "Studia Mongolica", Tomus, VI, Fasc, 17, 1967.
- (3) 布和, 劉照雄『保安語簡志』, 北京, 1982年, 87頁
- (4) 『土族語詞彙』 『土族語簡志』
- | | | | |
|-------------|-------|-------------|------|
| х а н т ө ө | 〈袖〉 | х а м д ө ө | 99頁 |
| х а л т ө ө | 〈綉子〉 | х а л ц ө ө | 98頁 |
| с а л х а н | 〈美國的〉 | с а л ц а н | 102頁 |
| б л х а : - | 〈擠〉 | б с а : - | 163頁 |
- (5) 喻世長『論蒙古語族的形成和發展』, 北京, 1983年, 25頁
- (6) Róna-Tas, A, "A Study of the Dariganga Phonology", AOH, X, 1960, P.16.
- (7) 那德木德「蒙古語察哈爾土語的元音和輔音」, 『民族語文』, 第5期, 1986年
- (8) Мөөмөө, С, Мөнх-Амгалан Ю, Орчин үеийн Монгол хэл, аялгуу, Улаанбаатар, 1984, P, 108.

參考文獻

- 布和等編『東鄉語詞彙』, 呼和浩特, 1983年
- 栗林均『東鄉語詞彙 蒙古文獻索引』, 東京, 1986年
- 劉照雄『東鄉語簡志』, 北京, 1981年
- 陳乃雄等編『保安語詞彙』, 呼和浩特, 1986年
- 布和, 劉照雄編『保安語簡志』, 北京, 1982年
- 哈斯巴特爾等編『土族語詞彙』, 呼和浩特, 1986年
- 昭那斯因『土族固語簡志』, 北京, 1981年
- 保朝魯『東部裕固語詞彙』, 呼和浩特, 1985年
- 昭那斯因『東部裕固語簡志』, 北京, 1981年
- 栗林均『東部裕固語詞彙 蒙古文獻索引』, 東京, 1987年
- 喻世長『論蒙古語族的形成和發展』, 北京, 1983年
- 樋口康一「審簡論文 喻世長『論蒙古語族的形成和發展』, 1983, 民族出版社, 97頁」
 『言語研究』, 117~136, 第3号, 1984年
- de Smedt, A. et A. Mostaert, "Dictionnaire Monguor-Français", Peiping, 1933.
- Mostaert, A, *Dictionnaire Ordos*, New York · London, 1968.
- Róna-Tas, A, "Dariganga Vocabulary", AOH, X III, 1961, PP. 147~174.
- "Dariganga Folklore Texts", AOH, X, 1960, PP. 171~183.
- Kara, G, "Un Glossaire Üjü m ü cin", AOH, XVI, 1963, PP. 1~43.